九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

スペイン戦争と東アジア ： 日朝中の連繋に関する研究準備のための覚書

石川, 捷治
九州大学大学院法学研究院教授

https://doi.org/10.15017/2294

出版情報：法政研究. 69 (2), pp.99-120, 2002-10-30. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

スペイン戦争と東アジア

――日朝中の連繋に関する研究準備のための覚書――

石川捷治

一　はじめに
二　スペイン戦争と中国
三　スペイン戦争と植民地朝鮮
四　スペイン戦争と日本
五　おわりに

一　はじめに

一九三〇年代後半の世界政治史における焦点の一つはスペインにあった。スペイン戦争の帰趨は、第二次世界大戦への道を開くのか、それを阻止しうるのか、という岐路に位置づけられていた。

一九三六年七月、フランコ将軍らの軍部が、合法的に成立した共和国の人民戦線政府に対して軍事クーデターを起こし、スペインは内戦（Guerra Civil Española 市民戦争）に突入した。[1] 二年八カ月におよんだ戦闘では、フランコ側に参戦した独・伊・北アフリカ等の兵士もいたが、「反ファシズム」の旗印のもと、世界五五カ国から四万五千人を超える人々がスペインの戦場に赴いた。[2] 彼らは「民主主義」「自由」「革命」「自主管理」などの理想の実現を目指し、国際義勇兵（International Brigaders）として参戦した。

「彼らの義勇兵たちを衝き動かしていたものは、多くの場合、政治的なものであるよりも、要するに市民的な情熱であった。彼らは各国での只の市民であり、職業的な軍人でも政治家でもなかった。アンドレ・マルロオやヘミングウェイ、ジョージ・オーウェルやW・H・オーデンなどの詩人や作家にしても、要するにフランスやアメリカ、英国の市民であった。[3]」

このように国際義勇兵の多くは、欧米の市民であった。[4] そのため、欧米以外のアジア・太平洋、[5] とくに東アジアでは、スペインから地理的に遠く離れていることもあって、東アジアの自分たちとは関連のうすい出来事としてしか捉えられていないようである。

しかし、東アジアからもかなりの数の人々がスペイン戦争に参戦した。また直接的にスペインの戦場に馳せ参ずる機会には恵まれなかったが、スペイン戦争に熱い関心を寄せたり、あるいはスペイン戦争との関連をもちながら、自らの

地で「スペイン戦争」を戦った人々が多数いた。東アジアとスペイン戦争との関連については、これまでいくつかの点を除けば、わが国ではあまり注目されていない。(6)

この小論は、時間的制約のため粗いエスキースにとどまらざるをえなかったが、日本・朝鮮・中国におけるスペイン戦争と人々との関係を明らかにし、スペイン戦争との関連で日・朝・中を結ぶものについて考えてみたい。(7) なお、この小論が今後の研究準備のための覚書に過ぎないことを最初にお断りしておきたい。

(1) スペイン戦争は、しばしば「スペイン市民戦争」と呼ばれた。それは「内戦」(Civil War) という意味と共にもう一つの意味があったと思う。それは詩人スペンダーがこの内戦を「詩人の戦争」と呼んだのと同じ理由である。

「それは個人の思想と意志が生かされる戦争という意味であった。事実それだからこそ、三〇年代詩人たちのほとんどがそれを詩にうたい、また多くの素人詩人が生まれたのであった。それに対して、国家の意志によっておこなわれる戦争においては、個人の意志は無視され、人々はただ組織の一員として動かされるにすぎない。そしてそこに、三〇年代詩人たちが大戦（第二次）についてほとんど歌おうとしなかった理由があった。」（小野協一『スペイン内戦をめぐって―イギリスの一九三〇年代文学―』研究社、一九八〇年、一七八―一七九頁）。

なお、スペイン戦争のコミンテルンへの影響等については、拙稿「コミンテルン史再考」（石川捷治・星乃治彦・木村朗・木永勝也・平井一臣・松井康浩『時代のなかの社会主義』法律文化社、一九九二年、所収）一一三―一二六頁を参照されたい。

(2) ヒュー・トマスによれば、フランコ側に、一万七千人のドイツ人、七万五千人のイタリア人、七万五千人の北アフリカ人、他方、共和国側には三万五千人の国際義勇兵、一万人の非戦闘員のボランティア、三千人のソ連軍人・技術者が参加したという。(Hugh Thomas, The Spanish Civil War, 3rd ed, Hamish Hamilton (London), 1977, p985. ヒュー・トマス、都築忠七訳『スペイン市民戦争』（新装版）下巻、みすず書房、一九八八年、二七四―二七七頁）。

(3) 堀田善衛『バルセローナにて』集英社、一九八九年、一八六頁。

(4) ヒュー・トマスによれば「英国人義勇兵の多くは、なにか個人的な悲しみや環境に順応できない苦しみをとりはらおうとして、そのためのはけ口を欲した人々であったようである。…あるものは冒険好きであったかもしれない。指導者の多くは時流におもねるスターリニストであった。しかし大多数はそのいずれでもなかった。おそらく彼らのうちのほとんど三分の一が、スペインで戦

闘中に死んだ。さらに多くの人々が、スペインでそうした経験を得たために、のちに政治上または職業上差別待遇をうけた。」（ヒュー・トマス前掲書、第一巻、二五八頁。Hugh Thomas, op. cit., p445, ではこの個所は消略されている）という。

(5) 例えば、オーストラリアでは、一人がフランコ陣営に参戦し、かなりの数の人々（約六〇名）が共和国陣営にボランティアとして参戦・参加した。次の文献を参照されたい。Inglis Amirah, Australians in the Spanish Civil War, Sydney, 1987., Amirah(ed) Letters from Spain, Sydney 1985., Amirah, From the Other End of the Earth; the Australian Nursing Unit in the Spanish Civil War, History '84 Conference, Melbourne University, August 1984., Nettie Palmer and Lan Fox, Australians in Spain, Sydney 1948., Judith Keene, A Spanishi, Springtime: Alleen Palmer and the Spanish Civil War, Labour History, 1987.

(6) 日本の研究では、次の文献が参考になる。川成洋「日本人とスペイン戦争」三輪公忠編『日本の一九三〇年代――国の内と外から――』彩流社、一九八一年。中村義「スペイン内戦と中国」東京学芸大学社会科学『紀要』第三部門第三三集、一九八一年、一二七～一四三頁。深澤安博「スペイン内戦と日中戦争――日・西外務省文書を中心に――」（『歴史評論』第四四七号、一九八七年、校倉書房）、塩崎弘明「フランコ政権の日独伊防共協定参加について――スペイン内戦と日本軍部との関係についての若干の資料」（斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社、一九七九年）。

(7) 私がこの問題を考える契機となったのは、一九九〇年における次のような体験である。少し長いが引用する。

「スペイン戦争に参加したイギリス人義勇兵たちに、偶然の機会から会うことができた。ロンドンで発行されている週刊情報誌“City Limits”を読んでいると、三行ほどの小さな記事が目にとまった。それは七月七日に国際旅団（International Brigade）の記念式典が開かれるというものであった。そこで私は出かけてみることにした。会場のジュブリー公園に着くと、集会はすでに始まっていた。参加者は八〇人ばかり、ほとんどが年輩の人であった。労働党の議員らしき人が演説中で、彼はスペイン義勇兵の反ファシズム闘争に果たした役割と意義を強調し、我々が政権に復帰して政策を変える必要があると力説しているようであった。そのあと数人が発言し、献花があって、三〇分ぐらいで式典は終わった。じつは話はそれからなのである。式典が解散した直後、何人かの人に話しかけてみた。すると東洋人は私一人だったこともあって、みんな気軽に質問に応じてくれた。その中に、ジミー・ムーン（Jimmy Moon）さんという男性（七七才）がいて、私に一緒に来いとしきりに言う。ついには、まごまごしている私を早くといってバスに乗せてしまった。発車してよく見ると、そのバスは国際旅団のもと義勇兵と医療関係者としてスペイン戦争に参加した女性たちのバスで、これから別のところで開かれる、内輪のパーティ会場まで行くというものであった。

そうしたわけで私はそのパーティへ闖入してしまった。

だんだんと話を聞くうちに、今日の集会にはドイツからも数人の女性が参加していることや、八〇才近い元義勇兵たちが、精神的には若々しく、今日でも反権力・反権威の立場で、反戦反核を始めとする様々な活動をしていることが分かった。またムーンさ

んが私を招いてくれた理由の一つは、たった一人（?‥石川註）、日本人として共和国側で闘ったジャック白井と同じマシンガン部隊に属していたことがあり、日本人が懐かしいと言うことであった。

彼は私に一九六六年七月一八日、つまりスペイン戦争勃発三〇年目の日に書いた“Cloudless Day in Spain”という詩をくれた。その詩の最後には“To Shoji Ishikawa from Jimmy Moon, 7th July 1990. In memory of Jack Shirai, machinegun boy 15 International Brigade”と記されていた。

そのパーティの後、三人の元義勇兵たちと近くのパブで話をした。それらを通じて実感したのは、彼らは特別の人ではなく、ごく普通の人であり、正義感の強い、率直な労働者であるということだった。本の中でしか知らなかった彼らと、実際に会うことができ、そのごく一端であるにしても、どのような人間であるのかを知り得たことの感激は言葉では表現できない。二一〇〇名いたイギリスからの義勇兵は、いま生存者約一〇〇名という。」（拙稿「ロンドン・ベルリン・ウィーン―垣間見た歴史的転換期のヨーロッパ」『九大学報』一九九一年三月号、九州大学広報室、一六―一七頁。

二　スペイン戦争と中国

中国からスペインへ

スペイン戦争の中国に与えた影響は、その地理的距離からは想像できない程、大きなものであった。中村義氏は、一般的な世論、直接参加者、中国共産党という三側面から詳しく分析し、次のように結論づける。「中国ではスペイン内戦を『対岸の火』としないという認識と論調であった。とくに、一九三六年一二月の西安事件を機にその認識は強まり、『中国を第二のスペインにするな』というシンボル的スローガンが各方面から提唱されていた。この風潮が抗日民族統一戦線の形成・強化を促進する状況をつくっていたといえよう。他方、このスローガンが自己を正当化するため、相手、

反対派を批判・攻撃するための〝錦の御旗〟の役目をはたしていたことも注意すべきであった。したがって、こうした状況では、公然とフランコ軍・反乱軍を支持する主張をとることはできなかった。ここは日本とは全く異なるところである。[1]」

スペイン戦争に参加した中国人は約一〇〇名で、ほとんどがヨーロッパ在住の華僑であったといわれている。[2]この約一〇〇名という人数がどれほど正確なものかは分からないが、四〇名～一〇〇名程度の参加者がいたようである。[3]彼らは国際旅団のなかに「中国支隊」を組織した。彼らは、労働者や知識人であったが、大部分が共産党員とそのシンパサイザーだったという。

毛沢東は、延安より「スペイン人民および武装同志へ」という一九三七年五月一五日付の書簡で次のように述べている。

「民主主義と自由のためのあなた方の英雄的なたたかいに共感を示しつつ、あなた方について報道しているニュースや論文や写真を掲載する新聞・雑誌が、中国では百以上も刊行されています。われわれは、あなた方の勝利が日本ファシストとたたかうわれわれの闘争にとって、直接的な援助となることを知っています。あなた方の努力していることは、われわれが努力していることでもあります。われわれは各国人民による国際義勇軍の結成を耳にしたとき、よろこびに湧きました。そして、中国人と日本人がその国際旅団に参加していることを知って、本当にうれしく思いました。中国紅軍の多くの同志がスペインに行って、あなた方の戦争に参加したいと、スペインの状況を毎日話しています。もし目の前に日本人の敵がいなければ、われわれはあなた方の戦いに参加します。[4]」

朱徳も毛沢東の手紙の二日前に「スペイン人民への手紙」を発表した。「私は一〇年間闘ってきた抗日部隊を代表し、現在スペインで闘っている人民及びその部隊に最高の敬意を表明する。我々の前線もあなたたちと一致し、共同の敵――あなた方はドイツ・イタリアのファシズムと我々は日本のファシズムである。あなた方と我々の勝利がファシズム

を亡すことになる。[5]」

中国共産党駐ソ代表の王明は、スペインの闘いを中国における民族解放闘争の勝利の展望と関連させて、次のように論じる。

「ファシスト叛乱軍に対して軍事行動を開始した当初、スペイン共和国政府は武器の行き渡らない労働者及勤労者達より成る僅許りの義勇軍を持っていただけである。然るに人民戦線のあらゆる党及組織、就中スペイン共産党の蹶起、国際プロレタリアートを始め民主主義的諸勢力よりの援助及共同活動に依り、スペイン共和国は一年に亘る武装闘争に於て五十万に達する正規軍を作り得たばかりでなく、近代的な軍事技術に依って之が軍備の充実を計る事も亦出来たのである。支那（ママ）よりも小さいスペイン共和国が其の武装闘争を通じて軍の充実を計り必要なる軍備を全うする事が出来た限りスペインよりも大きい支那（ママ）共和国が之を為し得ない筈はない。スペイン共和国がファシスト独伊の聯合軍に対する武装闘争に於て成功している限り大国支那（ママ）が一日本の侵略者共に対する武装闘争に敗れる筈はない。日本の侵略者共は戦争の初期に於てこそ軍事的技術的に優れているかも知れないが、結局戦争の勝利を確保する爾餘の諸条件に於ては、支那（ママ）国民の統一人民戦線に抗し得ないであろう。[6]」

スペインから中国へ

中国からスペインへはかなりの数の人々が参戦・参加した。またそれ以外に、視察団として派遣されたケースもある。西安事件の中心人物の一人である楊虎城を団長とする視察団はパリ在住の華僑の努力によって結成され、スペイン各地を回り、中国の抗日闘争の現状を報告し、盛大な歓迎をうけた。楊はバレンシアで次のように演説した。

「日本ファシズムが華北をうばい、都市港湾を占領し、人民を殺害し、文化を破壊するのに対して、中国では統一戦

線の英雄戦士が抵抗し最後の勝利を求めている。スペイン人民の不屈の闘いと、軍事設備等を観察し、帰国後の抗日運動に役立てたい。これがスペインに来た目的である。さらにスペイン民衆が困苦にたえて、沈着であることが、最後の勝利を我々に確信させる。(7)」

彼のような政治的経歴をもつ将軍が抗日統一戦線を訴えたことは、中国の諸党派や各界に与えた影響は大きなものがあったと想像される。(8) その他にも現実化した中国の抗日統一戦線運動への直接・間接の影響は複雑であったと思われる。したがって、スペイン戦争の中国への影響をみる場合、中国共産党の抗日民族統一戦線政策へのそれだけに限定することは事実を矮小化することになりかねない。

中国共産党の指導者たちは、スペインの闘いに連帯する意志を込めて、「中西（中国とスペイン）人民は連合しよう！　人類の共同の敵――ファシズムを打倒しよう！　朱徳、周恩来、彭徳懐　これを贈る」との旗を送った。国際旅団中国支隊の義勇兵たちはこの旗のもとでそれぞれ記念撮影を行った。それらの写真は、スペイン共産党、国際旅団などの機関紙にも掲載され、この旗は、現在、中国革命博物館に保存されているとのことである。中国支隊はスペイン各地を転戦し、多くの犠牲者を出したが、残った者は国際旅団の解散とともに主としてヨーロッパに戻った。そのうちの七名が中国に帰国した。スペインの戦場で三回も負傷した張瑞書は、帰国後ジャーナリストとして『解放日報』『新華日報』で活躍し抗日戦争に参加した。またスペインで砲兵隊政治委員を務めた謝唯進（林済時）も帰国後、抗日戦争に従軍した。

「スペインの次は中国だ」との合言葉のもと、スペイン戦争に参加した人々が中国の土を踏み、抗日戦争・抗日闘争に参加した。カナダの医師ノーマン・ベチューン（Norman Betune）もその一人である。これらの動きはスペインと中国にまたがる反帝反ファシズム運動のネットワークの萌芽的形成を意味するものといえよう。中国共産党はスペイン戦争に学び、抗日戦争とその後の内戦に勝利した。

しかし、中華人民共和国建国以降の中国においては、スペイン国際旅団を讃える「ハラマ河の歌」（メロディはアメリカ民謡の「レッドリバー・バレー」）を小学校の音楽教科書に載せ、ベチューン医師らの業績を子供たちに教えているにもかかわらず、スペイン戦争と中国の抗日統一戦線の具体的関連を明らかにする研究は、管見の限りではほとんどないようである。最近、中国人義勇兵についての中国語の研究書が刊行されたが、この本は台湾からの出版物である。(9)当時あれほど熱い眼差しを向けていたスペイン戦争とスペイン人民戦線を中国との関係において明らかにする研究がほとんどないのは不思議なことといわざるをえない。なぜなのだろうか。その点の解明が必要であるが、むしろそのことのなかに、スペイン戦争の中国抗日統一戦線運動への影響が一筋縄ではない複雑さをもつことを暗示しているように思えるのである。

（1）中村義前掲「スペイン内戦と中国」一四三頁。

（2）「西班牙内战中的中国支队」（http://www.88888888com.com/56/war/friend/data/175.htm〔二〇〇二年三月二八日〕）。なお、孟全生（北京師範大学）「コミンテルンとスペイン革命」も「一〇〇名以上」としている（中国語版『国際共産主義運動』一九八七年五―六号、一九八七年一二月）。

（3）坂井米夫がプラヤ・デ・ヴェニカシで会った中国人義勇兵は「われわれ（支那人）は四〇人入隊し、一五名負傷した」と述べた（坂井米夫、川成洋編『動乱のスペイン報告―ヴァガボンド通信―一九三七年』彩流社、一九八〇年、一五九頁）。

（4）毛沢東「スペイン人民に宛てた手紙」（一九三七年五月一五日）『解放週刊』第一巻第四期、一九三七年五月二四日、三頁、日本国際問題研究所『中国共産党史資料集』勁草書房、第八巻、四二五―六頁。なお、訳文は若干変えている。

（5）「朱徳総司令の手紙」（一九三七年五月一三日）Rundschau über Politik, Wirtshaft und Arbeiterbewegung Nr.36, 19. August 1937, Basel, S.1290.

（6）「支那事変に対する中共駐蘇代表王明の論説―日本帝国主義に依る侵略の新段階と支那国民に依る闘争の新段階―」『外事警察報』第百八十五号（昭和十二年十二月）八頁。前掲『中国共産党史資料集』五〇三―四頁。

（7）『救国時報』一九三七年一一月二一日、「楊虎城将軍在瓦倫西亜歓迎会上講演詞」（中村義前掲論文、一三六頁より再引用）。

（8）中村義前掲論文、一三七頁。

三　スペイン戦争と植民地朝鮮

植民地朝鮮とスペイン戦争のかかわり方は、中国とも日本とも異なるアプローチが必要である。スペイン戦争に参加した朝鮮人はいないのか、あるいは当時のスペイン戦争やスペイン人民戦線に関する認識や討論の状況はどうであったのかという問いには、残念ながら正面から応えることができない。管見の限りでは先行研究もほとんどないようであり、現在の筆者にはまだ充分に調べがついていないからである。と同時に、そのような問いそのものが、朝鮮に関しては必ずしも的を射たものではないともいえる。なぜならば、当時の植民地朝鮮は、ある意味では「スペインの戦場」そのものでもあったからである。

日本の支配に抵抗しているものにとっては、スペインと同種の闘いを強いられていた。また、スペインにおける民衆の闘いの敗北は、国際的ファシスト陣営を活気づかせ、日本のアジア全体への侵略の拡大につながり、植民地朝鮮の解放の展望は遠くなると捉えられていたのである。

したがって、ここでは日本帝国主義の植民地支配下という苛酷な条件のもとにおける朝鮮のスペイン戦争当時の状況のごく一端を明らかにし、次の研究ステップへの足がかりとしたい。

藤原正義氏は、京城帝国大学に在学中（予科を含めて一九三四年～四〇年）であったが、当時の状況について次のように述べる。

「朝鮮人（知識人、学生、高普生）の社会科学研究会の摘発・解散（三三年：一九三三年、石川註）を知ったのは予

科入学後であったが、予科には社研禁止・解散で内地の高校を退学したものが僅かながら入学していた。その中の一人（理科。医学部へすすみ、卒業後戦死）と偶然の機会から知りあった。社会科学関係の図書は既に発売禁止で、それでもあちこちの古本屋で探せば見つかったが、三五年頃には古本屋からも姿を消した。大学の三宅教授（経済学）が脱獄した朝鮮共産党（再建中）の幹部李某を自宅の地下室に隠まっていたことが知れて（李は逃走、三六年逮捕、獄中で死亡）検挙され（三四年夏）、その後、裁判中に書いたという「転向書」が戦意高揚の展覧会（於三越百貨店）に展示された。紋切り型の文章であった。[1]」

「三年次の初め（三六年）、友人二、三人と相談して先生方や学外の識者（朝鮮人）の談話を聞き質疑する会（文化談話会）をはじめたが、これは毎回予想以上に盛会であり、一人一人は不安と焦燥を内に沈吟し模索していた。[2]」

このような「文化談話会」において、スペイン戦争についてどのような会話がなされたのかは明らかではない。しかし、後述の九州帝国大学の学生と同様な談話が交わされたのではないだろうかと推測される。とくに私立の専門学校において反帝反ファシズム運動に参加したとして検挙された教授と学生がかなりいたようである。そのなかでのスペイン戦争への関心はどうであったのか、その実態に迫りたいと思う。さらに新聞・雑誌・非合法出版物等におけるスペイン戦争に関する記事を調査する必要がある。

パック・カップ・トン（Park Kap Tang）は、当時の抗日独立闘争の状況について次のように書いている。

「李載裕は　咸鏡北道　甲山の出身で　東京で苦学をしながら　朝鮮共産党の日本総局の幹部として活躍していた。李載裕は朝鮮共産党再建のため朝鮮に帰り、一九三四年京城市永登浦（工場地帯）の工場で働きながら苦学をしていた金三龍　東京高等師範学校を卒えて　京城の同徳女子高等普通学校で英語を教えていた李観述とその妹　李順今　中央江東普通学校（旧制中学）二年生の時から　共産主義活動をしていた李鉉相などと共に　党再建工作をすすめた。

ちょうどこの頃　京城帝国大学では　鄭泰植　権又成などの学生が　日本人の経済学教授　三宅鹿之助の指導の下で反帝同盟を組織して活動していたし　開城　平壌　海州　晋州　東萊などの各地で　学生とインテリを中心に　反帝サークルが組織されつつあった。

李載裕は　かれらを組織にひきいれながら　永登浦の多くの工場に　細胞組織をすすめる途中　一九三七年夏　ついに　組織がばれ　警察に逮捕された。彼は西大門署留置場を二度も脱出して　京畿道揚州軍蘆海面の山の中にかくれていたが　ついに　とらえられて　無期懲役の言い渡しをうけ　服役中　一九四四年　清州刑務所で獄死してしまった。(3)」

中国革命と朝鮮独立運動

「今となってはあの北伐に向かう革命家たちすべてが感じていた、浮き立つ心と熱狂とを思い出すことさえ難しい。それは六カ月にわたり揚子江の谷間に広がった。華北へ、朝鮮へ―私たちの心はおどった！『故国で、満州で、二千万朝鮮人が全アジアの自由のため武器をとって帝国主義と戦おうと待っている』と私たちは中国人に確信をもって語った。」―キム・サンのこのことばから、中国革命そのものが国際性をもって闘われた事実のみでなく、中国革命が朝鮮独立運動と深く結び合っていた事実を知ることができる。その結合の焦点こそが満州であった。(4)」

「満州、即ち今日の革命の鍵となる地域における朝鮮民衆運動の豊かな潜在力を、私は初めて認識した。私はまだ極東における革命課題を先導する中国問題に没頭していたが、朝鮮への絶大な信頼がよみがえり、わが祖国に対して私はこれまでにない希望を抱いた。(5)」

朝鮮におけるスペイン戦争の影響について考える場合、朝鮮だけを孤立して見るのでなく中国の革命運動との関連で

捉えなければ実態は見えてこないのではないかと思われる。その意味では、満州と朝鮮の連繋、一九三六年に間島（旧満州）で結成された祖国光復会の動き等のなかで再検討する必要があると考える。(6)

（1）藤原正義『思い出すまゝの記―戦中の朝鮮・中国、戦後のソ連』福岡県自治体問題研究所、一九九九年、一二―一三頁。
（2）同、一四頁。
（3）バック カップ トン『嘆きの朝鮮革命』三一書房、一九七五年、一三二頁。なお、李載裕については、卞恩眞「一九三〇年代京城地域革命的勞動組合運動研究」高麗大学校大学院・碩士学位論文、一九九一年、一五―二〇頁に詳しい。
（4）王魁喜・常城・李鴻文・朱建華、志賀勝（訳）『満州近現代史』現代企画室、一九八八年、三二〇頁―三二一頁。
（5）同、三二〇頁。
（6）たとえば、鐸木昌之「満州・朝鮮の革命的連繋―満州抗日闘争と朝鮮解放後の革命・内戦」（岩波講座『近代日本と植民地 6 抵抗と屈従』岩波書店、一九九三年・所収、姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン―一九三〇年代の東満・南満を中心として』青木書店、一九九三年、一二二―一三〇頁。

四　スペイン戦争と日本

「日本人」義勇兵

『東京朝日新聞』臨時特派員としてスペインを取材した在米日本人ジャーナリストの坂井米夫は、戦死した日本人の情報を聞いた。「一呼吸するにも苦しそうで見ておれない。イタリア人も死にかけている。『ぼくは、以前はアナーキストだった。ブルネテで、弾丸がなくなって…日本人の同志も、戦死した。』なに、何という名前だ、どこから来た、ど

んな男だ、驚いて質問したが、手を微かに動かすだけで、よく知らないのか、苦しくてこれ以上話せないのか、暫らく傍らに立って覗き込むようにしていたが、遂に、この三五番の患者は眼を閉じてしまった。

ブルネテの激戦はぼくも見ていたではないか。誰だろう。戦死した日本人、墓はどこにある、このままではスペインを去れない。マドリードへ引き返したいがそれは絶対に不可能だ。ヴァレンシアまで帰って再び手続きをしてマドリードに行って調べるか、墓だけはぜひ探したい—顔半分潰れたようにやられてスプーンで横からすすり込んでいる男に聞いたが、これも日本人が死んだことは肯定するが、それ以上のことは知らない。(1)」

「これだけは言おう。彼はもっとも勇敢な偉い同志だった。七月一一日午後一時頃、ブルネテ戦線で敵のシャープシューター（狙撃兵）に殺された。これ以上は彼の郷里の遺族が迷惑するから言えない」…「どういうふうにして戦死したのか？」「初め交替で炊事をやったら彼のコックが一番うまい。同志の絶対多数決で第一線に出るより炊事主任になってくれと頼んだら、とても憤慨して『俺はアメリカからコックをしにスペインに来たんじゃないぞ！』と怒鳴ったのにはみな謝った。誰からも好かれた男で、子供を非常に可愛がっていた。機関銃射手として各地に転戦し、その日はブルネテ激戦の五日目だった。塹壕は半分しかない。物凄い空爆に次ぐ空爆、砲撃で食物も水もとりに行けないのだ。ちょっとでも頭を出したらすぐやられる。彼が気軽に『俺が行こう』と立ち上がったとたんここ（頸部）を撃たれて即死したのだ」「名前は？年は？」「コムレード（同志）・ジャック、三五、六歳——(2)」

ここに出てくるのが、ブルネテで戦死したジャック・シライ（白井）である。彼についてはかなり多くの文献があるが、(3)日本—アメリカ—スペイン（—世界）を結ぶ当時の反戦・革命運動のネットワークのなかでの彼の人物像にもっと光が当てられてもいいのではないかと思われる。なお、本来国際義勇兵にとって人種や出生がどれだけの意味を持つかは不明だが、ジャック白井の朝鮮人説もある。(4)彼が「コリアン・ジャパニーズ」であった可能性も否定できない。

知識人や学生の間で

スペイン戦争が勃発した当時、日本には反ファシズム側でその意義や教訓をくみとるはずの社会主義や民主主義の確固たる運動や組織は存在していなかった。ここが中国と異なるところである。

一九三一年九月一八日から一九日にかけての日本軍による柳条湖事件に対して、九月二二日、日本と中国の両共産党が、日本帝国主義による侵略行為に抗議する声明を発した。これは、当時モスクワにいた三名の指導的日本共産党員、片山潜、野坂参三、山本懸蔵が署名したものである。[5] しかし、日本国内のコミンテルン系の運動は窒息させられかけていた。一九三二年一〇月には佐野学、鍋山貞親の指導的幹部が逮捕後転向した。「この脱党には他のものたちのそれが続き、満州と中国における日本軍の成果によって刺激された民族排外主義が、日本の左翼を蚕食し始めたことは明らかであった。日本の支配からの朝鮮と台湾の解放を求めた伝統ある共産党の主張も、障害となった。この時までには、闘争する日本の党の残余部隊とコミンテルンの間の通信は、ほとんど存在しなくなった。[6]」

日本における人民戦線運動の現実的動きは、フランス・スペインの動きに触発された左翼社会民主主義者によって反ファッショをかかげての労働戦線統一の運動や、「労農無産協議会」（加藤勘十委員長）が社会大衆党に「反ファッショ人民戦線」を目指して共同闘争を申し入れるなどとして顕在化した。しかし社会大衆党が一九三六年一二月の党大会で人民戦線運動の排撃を決定したため、日の目をみることなく終わった。非合法の日本共産党も、合法政党の社会民主主義政党もスペインの経験を日本に活かすべく主体的な取り組みはできなかった。

しかし、知識人や学生の間には、スペインの動向に注目する動きがあった。『京都帝国大学新聞』は、丸山幹治の「スペイン動乱と日本―世界平和の鍵は日英両国に」（一九三六年九月二〇日付）を掲げた。[7] 雑誌『改造』は昭和一一年（一九三六年）秋期特大号で『特集・スペインの内乱』を組んだ。[8]

政治学者前野良氏は、九州帝大在学中を回想して次のように述べる。「一九三六～三七年頃の今中次麿教授（当時九州帝大教授―石川註）の国際政治は、スペイン革命と反革命の分析であった。竹原君（竹原良文、戦後九大教授、政治思想史専攻―石川註）は、国際政治の講義のなかで、スペインの人民戦線運動に興味をもち、よく先生の研究室にでかけ、関係の外国雑誌を先生から借り出し、スペイン情勢とヨーロッパの人民戦線運動を私どもによく説明してくれた。スペインは当時、世界の反ファッショ、人民戦線運動の中心であった。左翼勢力には、社会党だけでなく、共産党それもコミンテルン派とトロッキズムの流れをくむものがあり、又、アナキズム、サンヂカリズム、バルセロナ自治独立を求める政党勢力があり、又、右派勢力には、君主派、地主勢力を代表する農民党、王党派、ナショナーレ派など地域と地域を代表する多くの群小政党が排出し、複雑なスペインの農村的市民社会を表現し、またソ連を入れた革新勢力の縮図でもあった。コミンテルン派は、スターリンの下にエルコリ（トリアッティ）が指導にあたり、血の粛清が行われていたことは、われわれは後で知ることである。ファシズムと反ファシズムのヨーロッパ全体の政治的縮図でもあった。竹原君は、実に克明にそれを記録していた。(9)」

帝国主義国日本においては、スペイン戦争の動向と日中戦争の侵略拡大とそれへの抵抗・反撃の増大を、どのような人々がどこで、いかに捉えていたのか、雑誌や新聞などを整理しつつ、さらに検討を進めなければならない。

また、フランスなど国外での日本人の反戦・反ファッショ活動がある。例えば、ベルリン滞在中に左翼活動に参加したため、ナチスに追われてパリに移住し、日本に帰国すると検挙されるのでそのままパリに留まり、スペイン国際義勇兵に協力し在欧中国人グループとも連絡して反ナチ・反ファシズム活動に加わった日本人青年もいたようである。(10) こうした無名の人々の活動を発掘し、再評価する必要があると考える。

（1）　坂井前掲書、一五二―一五三頁。

（2）同、一六五―一六六頁。

（3）ジャック白井については、例えば次のような文献がある。石垣綾子『オリーブの墓標――スペイン戦争と一日本人』立風書房、一九七〇年（同改訂版『スペインに死す』一九七六年。同『回想のスメドレー』三省堂、一九七六年。川成洋「日本人とスペイン戦争」（三輪公忠編『日本の一九三〇年代――国の内と外から――』彩流社、一九八一年・所収）。Steave Nelsan, The Volunteers: A Personal narrative of the fight against fascism in Spain, 1953. スティーブ・ネルソン、松本正雄訳『義勇兵』新日本出版社、一九七三年。石垣綾子『海を渡った愛の画家――石垣栄太郎の生涯』お茶の水書房、一九八八年、一三六―一四〇頁。

（4）「白井は朝鮮人だという噂を聞いたことがある。それは彼が訥弁で、日本文字もろくに読めなかったからであろう。彼の母親が朝鮮人であったかもしれない」石垣綾子『オリーブの墓標』四〇頁。川成前掲「日本人とスペイン戦争」三一六―七頁。

（5）Internationale Presse-Korrespondenz, No.95, October 2, 1931, pp.2138-2139., No.97, October 9, 1931, p.2182.

（6）E・H・カー、内田健二訳『コミンテルンの黄昏』岩波書店、一九八六年、三四四頁。

（7）『京都帝国大学新聞』には、丸山論文の他に、世界情報として北川正夫「スペイン・内乱二年」（一九三八年六月二〇日号）、禰津正志「スペインに関する最近の洋書二三」（一九三七年七月五日号）がある。

（8）たとえば、次のような記事が掲載されている。『**改造**』には、淡徳三郎「西班牙に於ける〈人民戦線〉の勝利」（一九三六年六月）、フランク・ピッカーン、荒畑寒村訳「スペイン内戦参戦記」（一九三七年四月）、『**文芸春秋**』には、笠間果雄「スペイン動乱の背景」木下半治「スペイン動乱と人民戦線の将来」（一九三六年九月）、青木新「左右両翼の抗争―動乱のスペイン」、イリヤ・エレンブルグ「マドリードを駈ける」（一九三六年一〇月）、『**中央公論**』には、益田豊彦「スペイン動乱と国際的投影」（一九三六年九月）、立作太郎「スペイン内乱を繞る国際法問題」、E・ヴァルガ「革命スペインの基本的分析」、柳沢健「西班牙を想う」（一九三六年秋季特大号）、「ルポルタージュ嵐のスペイン」、アンドレ・ジッド「スペイン民衆におくる言葉」、ロマン・ローラン「世界の良心に訴う」、イリヤ・エレンブルグ「昨日も、今日も、明日も」、シモンヌ・テリィ「マラガの悲劇」、アンドレ・ヴィオリス「マドリイドは生きている」、トリスタン・ツァラ「自由の前哨戦を行く」、エリイ・フォール「ドン・キホーテは死んではいない」、アンドレ・マルロー「スペインでは人間の条件が鍛えられている」、ネーション誌「スペイン問題をめぐるトロッキーとマルローの論戦」『**セルパン**』には、与謝野秀「革命スペインの実状」（一九三六年九月）、鈴木東民「スペイン動乱と欧州の動き」「ルポルタージュ・革命のスペインを見る」、ジョルジュ・ソリヤ「バルセロナの叛乱」、クロード・ブランシャール「バルセロナの市街戦」、ペロネ・ド・トレス「革命のマドリッドに入る」（一九三六年一〇月）、「特集　スペイン革命の批判」ラモン・フェルナンデス「スペインのファシズム」、ルイ・パロ「スペインの知識階級」、マルセル・モンタロン「何故イルンは陥落したか」、ヴェントラ・ガッソル「何故教会が焼かれたか」、「スペイン作家会議の宣言」（一九三六年一一月）、「特集　スペイン」アンドレ・マルロー「スペイン

現地の報告」、福永英二「スペインから帰ったマルローと語る」、T・S・エリオット「スペイン革命と政治思想の頽廃」、フランソワ・モーリャック「スペインの悪霊」、「スペイン戦線に立つイギリス知識人と文学者」、「救われた首府の芸術品」、「スペインは恰かも各国空軍の性能実験場」（一九三七年五月）、「特集　スペイン」トーマス・マン「スペイン民衆の側に立つ」アンリック・モレノ「ウナムノの弁護」「スペイン不干渉協定」「アメリカ、スペイン行き旅券の交付停止」（一九三七年六月）、アンドレ・ジッド「私はスペイン人民の味方である」アーネスト・ヘミングウェイ「伊軍敗戦の現地報告」マックス・プローマン「青年よ、スペインへ行くな」「イギリスはスペインに何を求めるか」（ニューリパブリック誌）スティーヴン・スペンダー「スペインに於ける民衆」「叛軍ゲルニカを空襲」ベン・リーダー「スペインからの最後の手紙」（一九三七年七月）、W・H・オーデン「ヴァレンシアの印象」ウォルター・リップマン「スペインと英仏の共同戦線」筑紫明「バルセロナ暴動の真相」（一九三七年八月）、関口弘「ピカソとスペイン革命」「スペイン文化擁護国際作家会議報告」アンドレ・マルロー「これが戦争だ」（一九三七年九月）、アンドレ・シャンソン「スペインを見よ」「何故英国は不干渉政策を執るか」「再軍備と平和」（イーデン英外相の演説）（一九三七年一〇月）、イリヤ・エレンブルグ「アラゴン戦線にて」トリスタン・ツァラ「スペインの美しさ」（一九三七年一一月）、「スペイン革命と各国の権利」（一九三七年一二月）、アンドレ・マルロー（滝口修造訳）「希望―スペイン挿話」アレグザンダー・ウァース「フランスとスペイン問題」「スペイン戦線を報告す」（ニュー・ステイツマン）（一九三八年一月）、「スペイン全戦線の展望」（一九三八年三月）、マルカム・カウリー「スペイン現地報告」クロード・ファレエル「フランコ将軍会見記」（一九三八年四月）、アーネスト・ヘミングウェイ「スペイン現地報告」ネグリン首相（共和軍側）の放送から「スペインの平和説は可能か」（一九三八年八月）、シオドア・ドライサー「スペインへ入る」エルンスト・トラア「スペイン戦線の報告」（一九三八年一二月）、林二十六「スペイン人民戦線派の最後」（一九三九年七月）『**世界文化**』では、「二五〇人対四人―サラゴッサ戦線の一挿話」（一九三六年一一月）、「スペイン通信」（一九三七年一―一〇月）。

(9)　柏經学・小山勉・松富弘志編『近代政治思想の諸相』お茶の水書房、一九九六年、三四七頁。

(10)　加藤哲郎『モスクワで粛清された日本人―三〇年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』青木書店、一九九四年、二七六頁。

五　おわりに

スペイン戦争は一九三九年フランコの勝利によって終わる。国際的な観点からすると、フランコ側の勝利は、結果としてファシズムの勝利を意味していた。成立したフランコ体制が厳密な意味でファシズム体制であったかどうかは別にして、国際的な力関係においての意味づけである。逆の面からいえば、それはこの時点における西ヨーロッパの民主主義とコミュニズムの敗北をも意味していた。国際義勇兵たちもそれぞれの地へと引き上げた。スペイン共和国政府の敗北は、第二次世界大戦への道をひらいた。そして第二次大戦後において、中国、朝鮮はともに「内戦」を経験することになる。

これまでの日朝中のスペイン戦争をめぐる人々の連繋を通じていえることは次の二点であろう。

㈠人々はスペイン戦争について、スペイン共和国支援という立場だけでなく、日本帝国主義との闘いという、自らの闘いとして位置づけていたことである。㈡日本を除けば、中国も朝鮮も第二次世界大戦後に、大規模な「内戦」を経験した。つまり、スペイン戦争の終結が、中国や朝鮮にとって、別の「スペイン戦争」の始まりを意味していたのである（そして、まだ終ってはいないのである）。

今日、スペイン戦争への関心は、一九六〇年～七〇年代と比較するとかなりの程度低くなっているといえる。その当時は例えば、次のような問題意識に裏打ちされていたのである。

「私が三十年前のスペイン戦争にこだわるのは、そこに私自身の心を強く惹きつける何かがあるからだ。私にとってのスペイン戦争は、常に日本が二つの陣営に分かれて内戦を戦う不幸な幻想と共にある。北日本と南日本の、正規軍とゲリラ部隊が、外国の軍隊に支援されて殺しあう状況を、私はしばしば思い描く、その実感に支えられてこそのスペイン戦争なのである。…

ナショナリズムとインターナショナリズム、アナーキズムとマルキシズム、そして人間の理想と愚劣さ、献身と殺人、そういった、さまざまな問題の原型をそこに見、そこに確かめ、日本内戦の不吉な影を白日の下にさらしたいという衝動が私をとらえてはなさない。スペイン戦争とはいわば私自身にとっては、いまたしかに直面している一つの現実に他ならないのだ。(1)」

「脱冷戦」状況においては確かに「内戦」の可能性は現実的とはいえない。しかし、スペイン戦争をめぐる東アジアの連繋をさぐることは、スペイン戦争と日中戦争と反帝反ファシズム運動という三者の複雑な連関を明らかにし、ひいては、東アジアにおける二〇世紀的冷戦構造を最終的に崩壊させるための示唆を与えてくれるという意味で今日的ではないかと考える。

（1）五木寛之『わが心のスペイン―シンポジウム〈スペイン戦争＋一九三〇年代〉』晶文社、一九七二年、九頁。

参考文献

柏經学・小山勉・松富弘志編『近代政治思想の諸相』お茶の水書房、一九九六年
日本政治学会編『年報政治学二〇〇〇　内戦をめぐる政治学的考察』岩波書店、二〇〇一年
姜在彦『満州の朝鮮人パルチザン―一九三〇年代の東満・南満を中心として』青木書店、一九九三年
バック・カップ・トン『嘆きの朝鮮革命』三一書房、一九七五年
野原四郎『中国革命と大日本帝国』研文出版、一九七八年
三輪公忠『共同体意識の土着化』三一書房、一九七六年
三輪公忠編『日本の一九三〇年代』彩光社、一九八〇年
坂井米夫著、川成洋編『動乱のスペイン報告・ヴァガボンド通信――一九三七年』彩流社、一九八〇年
倪慧如・鄒寧遠『橄欖桂冠的召喚―参加西班牙内戦的中國人（1936―1939）』人間出版社、台北市、二〇〇一年

梶村秀樹・姜徳相編『現代史資料　29　朝鮮（五）』みすず書房、一九七二年
磯谷秀次『わが青春の朝鮮』影書房、一九八四年
川成洋『スペイン戦争―ジャック白井と国際旅団』朝日新聞社、一九八九年
同『スペイン―その民族とこころ』悠思社、一九九二年
川合貞吉『ある革命家の回想』谷沢書房、一九八三年
東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会8　運動と抵抗』下、東京大学出版会、一九八〇年
岡本宏『日本社会主義史研究』成文堂、一九八八年
石川捷治・星乃治彦・木村朗・木永勝也・平井一臣・松井康浩『時代のなかの社会主義』法律文化社、一九九二年
犬丸義一『日本人民戦線運動史』青木書店、一九七八年
E.H.Carr, The Twilight of Comintern, 1930-1935. Macmillan Press Ltd. 1982., E・H・カー、内田健二訳『コミンテルンの黄昏』岩波書店、一九八六年
E・H・カー、富田武訳『コミンテルンとスペイン内戦』岩波書店、一九八五年
Hugh Thomas, The Spanish Civil War, 3rd ed Hamish Hamilton (London) 1977., ヒュー・トマス、都築忠七訳『スペイン市民戦争』（新装版、ただし第一版の日本語訳）みすず書房、一九八八年
スペイン史学会編『スペイン内戦と国際政治』彩流社、一九九〇年
トム・ウィントリンガム、川成洋・大西哲訳『スペイン国際旅団』彩流社、一九八九年
バーネット・ボロテン、渡利三郎訳『スペイン革命全歴史』晶文社、一九九一年
楠貞義、ラモン・タマメス、戸門一衛、深澤安博『スペイン現代史―模索と挑戦の一二〇年』大修館書店、一九九九年
Andrew Forrest, The Spanish Civil War, Routledge, London & New York, 2000.
Victor Hoar, The Mackenzie-Papineau Battalion, The Copp Clark Publishing co, Ontario, 1969.
Gabriel Jackson, A Concise History of the Spanish Civil War, Thames and Hudson Limited, London, 1974.
International brigade Memorial Archive―Catalogue 1986, Marx Memorial Library.
International brigade Memorial Archive―Catalogue 1990, Marx Memorial Library.

（付記）　本稿の作成にあたり、文献・資料や情報等に関して、スペイン市民戦争を研究する中村尚樹氏（ジャーナリス

ト）、中国語・朝鮮語の翻訳に関して、金哲氏（九州大学大学院法学府博士課程・政治史）、諸整理に関して伊地知敬子氏の各氏に大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。また、ソウルおよびメルボルンに滞在中の見聞も役に立った。お世話になったモナッシュ大学政治学部、高麗大学校亜細亜問題研究所に感謝申し上げたい。

文字通りの拙文ではあるが、大学院時代、北九州大学時代そして九州大学において御交誼をいただいた大隈義和教授の御還暦をお祝いし、今後のますますの御健康と御活躍を祈念して祝意に代えたい。